法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-13

戦中戦後知識人の担った使命と役割(7)

CHOI, Seonho / 崔, 先鎬

(出版者 / Publisher)
法学志林協会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法学志林 / 法学志林
(巻 / Volume)
108
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
2010-09-29
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006979

Hosei University Repository

戦中戦後知識人の担った使命と役割（七）

崔　先鎬

1．価値の実践―朝河貫一をめぐる背景

日本や朝鮮半島などの祖国を離れて活躍した知識人のなかには、多大な業績を残しながらも、国内ではその存在が長年忘れ去られてきた人物もいるだろう。朝河貫一（一八七三―一九四八）はその代表例である。一九四八年八月、イェール大学名誉教授であった朝河貫一の訃報を受けて、米通信社ＡＰとＵＰＩが「日本における最も高名な世界的学者の死」として報道したが、日本の新聞では単なる小さな死亡記事として、さらには国外からの情報であったために彼の姓氏さえ異なる文字で表記されたものであったという。朝河は自身の学問的業績に加え、在米日本人の大学知識人として日露戦争から第二次大戦終戦まで政治的にも活躍しており、近年再評価の動きも高まりつつあるが、ここでは彼の初期の思想の一部を振り返ってみたい。

Hosei University Repository

朝河は、明治六年（一八七三年）十二月二十日、現在の福島県二本松市となった福島県安達郡二本松町にて旧二本松藩士朝河正澄とウタ夫妻の長男として生まれた。彼の学問世界における価値の形成の過程に於いては、彼自らを取り巻いてきた個人的な生育環境に大きな関連性を宿していると考えられる。明治時代になると、これまでの長きにわたって社会制度を構成してきた士農工商という身分的階級制度は廃止されたものの、朝河家は国家的内戦のなかで犠牲者が出たことによって生じた家督相続の問題をのり越えて士族として残った。しかしながら、奥羽越列藩同盟に加わり戊辰戦争に敗れ、家屋敷ばかりか秩禄も失い、新政府への仕官の道も閉ざされていたことにより、明治の新時代には急激な生活の困窮に襲われたのである。そんななかで、父の正澄は、伊達郡立子山村の天正寺の離れに建てられた村立小学校の校長として、山中へいわば都落ちしながらも天生寺の庫裏に一家で住まい、村ごとすべての教育にうち込んだのである。成人した以降の朝河が留学に赴いて以来、父を外地での拠り所とし、どれだけ誇りを懐いていたかは、イェール大学図書館に残る朝河の遺品のなかに、村長からの感謝状と村人八百八十人余の連名によって敬慕の念がつづられた「報恩之辞」が残されているところに表れている。[1] これは、父が校長を務めた小学校を去る際に贈られたものである。

朝河は、幼い頃から武士の子としてのしつけの一環として漢文の素養を身につけさせられたようである。父親によって日常における士族としての品格保持の重要性について教育を受けると同時に、朝河家の歴史やかつての二本松での戦争のことを伝え聞いていたであろう。明治維新の結果、藩閥政治が行われ、中央でも福島県出身者などが地域差別を受けることが多かったことを考慮すれば、そうした経験が朝河の人格の核として大きな影響を及ぼしてきたものと考えることは容易である。明治維新から間もない頃の近代期の日本に生まれた朝河だが、このように士族としての

Hosei University Repository

家庭教育を受けた彼にとって、士族として守るべき第一の行動様式とは「節度」ないしは「武士道」であって、維新の文明開化という名のもとに西洋化されても、士族としての伝統意識までを廃棄することは決してできなかったものと考えられる。むしろ没落した士族であったことこそが、武士的な伝統意識をより強く育むもととなったのではないだろうか。彼は、日常的生活における「節度」の保持こそが人間としての最良の価値であると志向しつつ、このような日常的節度というものから社会に向けて充実した献身、そして貢献が可能となるものと判断していたに相違ないだろう。

貫一がまだ二歳だった明治九年（一八七六年）一月には、母親のウタが病気で死去したが、後の養母には愛情を注がれたようである。明治十年（一八七七年）六月には、父親の勤務先である立子山小学校の改築に伴い教員宿舎が完成し、ようやく朝河一家は天正寺から学校の敷地内の教員宿舎に移り住むようになる。明治十二年（一八七九年）五月に立子山小学校に入学したが、高等小学校の最終学年には、英語教師のいた川俣高等小学校に転校をする。父親は薄給であったため、明治二十年（一八八七年）四月には旧制福島県立尋常中学校（現在の福島県立安積高等学校）に進学し、特待生となっている。当時、資力に恵まれない士族の子女は授業料が免除される師範学校に進むものが多くを占めていたが、朝河は父の意志に反しそれを望まなかった。多くの日本人にとって、日本は封建制という暗黒から脱け出した明るい明治という時代のはずなのだが、朝河にとっては逆臣となった東北地方の没落士族としての環境のなかで、世の中の矛盾や社会正義に敏感な少年時代でありつつも他の多くの青年同様に、広い新しい世の中での成功を夢見たことであろう。

卒業後、嘱託で尋常小学校の英語教師を務めた後、明治二十五年（一八九二年）十一月には、現在の早稲田大学の

Hosei University Repository

前身である東京専門学校文学科に編入学する。とはいえ学資に困窮していた朝河は、友人に紹介された杉並区荻窪に位置する東京本郷教会の牧師横井時雄（一八五七―一九二七）が主催する雑誌『六合雑誌』の編集を手伝うことで生活の糧を得ることとなった。彼はそのなかで、一部不本意ながら明治二十六年（一八九三年）六月に洗礼を受けキリスト教徒になるのだが、横井がアメリカ合衆国北東部のニューイングランド（New England）地域のニューハンプシャー州（New Hampshire, NH）ハノーバー市（Hanover）グラフトン郡（Grafton Country）に位置するダートマス大学（Dartmouth College）の学長W・J・タッカー（Professor William Jewett Tucker）に朝河の留学援助を依頼し、直後の明治二十七年（一八九四年）にはその了解が得られたことから、渡航費のみでのアメリカ留学が実現するところとなった。恐らく彼は、英語や西洋文化には関心を寄せていたが、当初キリスト教徒になるというのは、精神的にそう容易なことではなかったらしく、『六合雑誌』には彼の正直な気持ちがつづられている。明治二十八年（一八九五年）七月、東京専門学校を首席で卒業した朝河は、学校関係者などに借金を依頼、大隈重信・大西祝・勝海舟・渡辺弥七・徳富蘇峰らに渡航費用の援助のうけ、明治二十八年（一八九五年）十二月に二十二歳で日本を離れ、アメリカ留学の道のりに入った。[2] 翌年の明治二十九年（一八九六年）にはアメリカのダートマス大学の教養学部（College of Liberal Arts）一年に編入学するが、彼は、合衆国のなかでも、人種的にとりわけ白人の比率が高く、キリスト教、そのなかでもプロテスタント信者の数が多数を示すこの地域の雰囲気によって青年時代の精神世界の形成に大きな影響を与えられ、かつ新たな学問世界の形成にも大きな影響を与えられたものと考えられる。

明治三十二年（一八九九年）五月には、ダートマス大学を卒業し、同年の九月にはイェール大学（Yale University）の大学院歴史学専攻（The History Specialty of the Yale Graduate School）に入学した彼は、そこでもダート

Hosei University Repository

マス大学の学長W・J・タッカー教授の援助のもと、博士学位論文"The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D."（日本における黎明の制度様式の導入―六百四十五年の改革に関する研究、和文翻訳書は『大化改新』として出刊）というテーマで博士学位（Ph. D）を取得した。[3] 同年の九月からは、朝河自らの母校のダートマス大学の講師（Lecturer）となって東西交渉史（History of East-West Negotiations）などの講義を担当するようになった。上記の学位論文"The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D."（『日本における黎明の制度様式の導入―六百四十五年の改革に関する研究』、和文翻訳書名『大化改新』）において朝河は、日本における歴史の全体的な枠組みについて概観しつつ、二つの革命的状況の出発点として「大化改新」と「明治維新」を挙げている。

後日の大正二年（一九一二年）六月に雑誌"The Journal of Race Development（JSTOR）"を通して発表された論文"Some of the Contributions of Feudal Japan to the New Japan"（近代日本が封建日本に負うものについて）を参照してみると、近代国家として生まれ変わった日本が力強く近代化の歩みを進める上で、封建時代の日本から継続した「武士道」が特別な役割を果たしたと繰り返しうったえつつ、道徳（Morality）と社会生活（Social Life）といった二つの側面からの「節度」（Moderation）の重要性[4]について述べながら、同時に日常的生活様式における節度について強調している。なお、西洋世界に『武士道』を初めて紹介した新渡戸稲造の本がアメリカで出版されたのは、明治三十三年（一九〇〇年）であった。このような彼の考え方を形成する背景には、中世から近世までに亘って長い時間の経過を通して彼の遺伝子のなかに叩き込まれた武士階級としての節度に対する認識が深く関係するものと考えてよいもしれない。

Hosei University Repository

2. 日本史における封建制度の存在意義についての研究

—初期における朝河の学位論文 "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D." の序文（Introduction）を中心に

朝河がイェール大学に博士学位申請のため提出した学位論文は、日本の封建制を分析した "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D." であった。この学位論文の中で彼は、アジア諸国並びに西洋における歴史的変動について分析しつつ、その中から日本との関わりを探り出した上、日本の歴史全体の枠組みの中における革命的状況として同定した二つの時代状況、すなわち、大化改新（the Reform of 645）と明治維新（the Restoration of 1868）を、伝統社会における「封建制度」（the Feudal System）の形成と消滅の転換的な局面として想定したのであった。この論文のなかで朝河は、「大化改新（the Reform of 645）」および「明治維新（the Restoration of 1868）」といった出来事を、日本の歴史に於ける「最も大きい二つの危機的状況（the two greatest crises）」として認識していた。封建社会は、大化の改新後、およそ五百年にわたり徐々に形づくられていったものであり、武士が政権を掌握した後の七百年の間は現実に日本の統治に関わる社会体制として続いてきたものと見なしていた。

…The position of the Reform of 645 in history may further be seen when it is said that it forms one of the two greatest crises of the national career of the Japanese people, the other being the Restoration of

Hosei University Repository

1868.

The former was followed by five centuries of a gradual feudal formation and then by seven more centuries of an actual feudal rule of the Empire, which was finally replaced in 1868 by the Imperial authority, the same power that realized the change of 645.(5)

…歴史上の六四五年の大化の改新の位置づけは、さらには日本人の国家的歴史における最大の危機ふたつのうちの一つであり、もう一つの危機が一八六八年の明治維新であることにも及んでいると見なせるかもしれない。前者の大化改新の後は、五世紀にわたり次第に封建的となっていった、そして七世紀以上の間、実際に日本帝国の封建的治世が続いた。日本帝国は、最終的に一八六八年、六四五年の変革をもたらしたのと同一の権力であった天皇の権威に再びとって代わられたのであった。(6)

このように長い時間をかけて形成されてきた伝統社会が、一八六八年の明治維新によって、非常に短い時間の間にその体制の変化を進めていく様子は、当時の日本人とって大きな驚きであり、朝河は国家的危機と捉えた。散髪脱刀令など文明開化と称した単純な西洋化や士族階級にとって致命的となった徴兵制の施行、新たな宗教的伝統を作るための神仏分離と廃仏毀釈、こうした長い伝統の意識的な転覆は、革命の名に値するものであったと考えられる。恐らく既存の伝統性が急転換されたという革新的時代雰囲気のなかで、朝河が、この二つの時代的山場を貫く存在として考えたものが、日本における制度としての天皇の存在であった。言うまでもなく明治の国内的時代状況においては、

Hosei University Repository

天皇を君主とする新制度が依拠した万世一系という国家神道の形成による国家主義イデオロギーが強力に展開されはじめたことにより、日本の歴史において過去の「天皇」である皇祖という存在を学術的であるにせよ客観的に相対視することは、極めて不敬な行為であったと考えられるのである。彼が英語で書かれた『大化改新』を決して日本語の翻訳版として作成しなかったことにはそうした理由も大きい。朝河は、大化改新と明治維新の共通点について異文化の融合と折衷によって日本共同体（Japanische Gemeinde）の再建のために行った変革であるという画期的な意味付与を行った。それと同時に、この変革の際に制度としての天皇の存在が大きな役割を果たしたことを広く欧米の知識人社会に紹介したのであって、決して天皇の権威を貶めるものではなかったといえるだろう。日本の歴史における天皇システムの大きな役割を明示したことは大きな意味を有するものであると考えられる。

… (This last consideration suggests that) the historical interest of the Reform does not merely consist in its relation to feudalism, but also to the Imperial institution of Japan, whose unique position among the monarchies of the world has been a subject of much wonder and misunderstanding.

The student of comparative politics can hardly afford to neglect the study of the highly instructive history of the position of the Emperor in the national organization of Japan. It is the Emperor that forms the connecting link between the Reform and the Restoration. This is not all, for the Emperor antedated as well as instituted the Reform; not only subsisted in spite of feudalism, but also was the safeguard of its endurance; then survived it; and since has become the inspirer of Japan's enthusiastic national sentiment.

Hosei University Repository

It is impossible to understand the national life of that country without a correct knowledge of the status of her Sovereign, nor can interesting history of his powers and the still more interesting evolution of his relation to the people be intelligible without a careful study of the Reform and the circumstances that caused it. The Reform of 645 forms, there, in the history of Japan a great turning point. Its mastery seems essential to the study of that history.(7)

…（このうちの最後の考え方は、）大化改新への歴史的な関心が単に封建制度との関連を有するばかりでなく、世界の君主制のなかでも多くの驚異と誤解の主題であり続ける唯一無二の日本の天皇制度にも関連している。比較政治学の研究者なら、日本の国家組織における天皇の位置にまつわる非常に示唆的な歴史研究を無視するようなことはできないだろう。大化改新と明治維新をつなぐものを形作るものこそ天皇なのである。それがすべてでなく、天皇は大化改新を制度化したのみならず先行していたのである、というのも封建制度にもかかわらず生存したばかりかその存続の安全装置であったのであり、そして生き残り、以来日本の熱狂的な国民感情に息を吹き込む者となっているのである。かの国の国民生活を理解するのに、その君主の地位の正しい知識なくしては不可能であり、そしてまた大化改新とそれを引き起こした要因の注意深い研究なしに、彼の権力の興味深い歴史やなおもより興味深い人民との関係の発展が理解可能にはならないのである。かの六四五年の大化改新は、日本の歴史における大きな転換点であり、その精通は日本史の研究に不可欠なものだと思われる。(8)

Hosei University Repository

朝河は、大化改新を日本における封建制度の起源として位置づけつつも、歴史における天皇の存在の神話的側面と事実的側面を取り分けて、新たな時代の歴史認識の出発点にしたいと考えたのであろう。封建制度における社会統合的側面を天皇の象徴的存在意義を通して拡張し、これに制度的・文化的確信を加えた独自的な統治の形態を確定し、機能的結合を果たそうとしたという彼の考え方が見られる。また、彼は、日本における封建制度と西欧におけるFeudalism、そして中国における封建の意味との単純な比較を通して封建制について説明を行っただけにとどまらず、その背景となる時代性の解明を通して封建制度における個人と社会との関係に対しても意味を付与している。

日本における封建制度の到来は、まさに大化改新の国家と天皇の不適合から始まったものであった。日本が封建制度を抜け出したときに、歴史的な継続性を守ったものはまたも制度としての天皇の存在（The Institution of the Emperor）であるとともに、このように、日本における制度としての天皇の地位とは、社会統合のためには最も実用的な制度装置であると彼は判断していたのであろう。無論、現在の時点から判断した場合、天皇の制度的な継続、継承論については伝説ないし神話的側面が多く存在するという議論の余地も残るが、むしろ制度としての天皇の存在について単なる政治的支配者としてではなく、人々に道徳的影響力（moral control over the people）を与える「徳」を体現する存在として評価したところは、欧米の知識人が天皇の人間的側面を評価できる契機を提供したものと考えられる。恐らく欧米の知識人たちにとって、日本の歴史についてのこのような内容の紹介は驚かされるものがあったであろう。

一方、朝河は、ヨーロッパにおいてもキリスト教が有する様々な社会的権威によってFeudalismを成立させた歴史的経緯があったものと判断していた。そこには、キリスト教による王権政治への関与とともに、キリスト教の信仰

的指導者たちによる「徳」の影響力の発揮が政治的構成という側面に大きく関わっていることについての問題提起を行っている。

…What would have been the history of Europe if it had missed one of its greatest factors, Christianity? The question is simple but momentous, and perhaps no amount of imaginative effort would succeed in constructing such a history. The influence of a religion on the individual must be as carefully distinguished from that on the society, as should be the process of the mental action of a single person from that of an aggregate of persons. Another primary distinction seems to be that a religion may deeply influence individual and social conduct in history, either as a great institution, or as a profound principle of spiritual activity. It is sometimes too well-known that the church as an institution is a complex body of interests, material as well as spiritual. On the other hand, many noble deeds and great events have appeared in history from no conscious intent to serve the church, although they often sprang from deep spiritual character or ideals formed more or less in accordance with the teachings of a religion. Only by drawing these and many other distinctions may a student approach the great question stated at the beginning of this paragraph.

Questions of this nature must always seem to imply a shadow of faith in the blind chance. Our question was, however, started in order to serve as view, of the subject of this essay.(8)

Hosei University Repository

Hosei University Repository

ヨーロッパにおける歴史を構成する最も大きな要素の一つであるキリスト教がなかったならば、どうなっていたであろうか。これは単純ではあるが、非常にゆゆしき問題であろう。多分想像力をどれだけ駆使したところで、そうした歴史を構成することには成功しないだろう。宗教の影響というのは、一人の人間の精神的活動の過程が集団のそれと異なるのと同様に、個人に対するものと社会に対するものは注意深く区別されなければならない。もう一つの重要な区別は、偉大な制度や精神的活動の深遠な原理のように、宗教が歴史における個人的・社会的行為に対して深い影響を与えているかもしれないところにあると思われる。ときに制度としての教会が精神的な利害のみならず、物質的利害の複合体であることはあまりによく知られている。他方、歴史上出現してきた多くの気高い行為と卓越した出来事は、それらがしばしば多かれ少なかれ宗教的教義と協調的に形成された深い精神的性格や理想から生じたものであるにもかかわらず、教会に奉仕しようとする良心的意図によって生じたものではないと見なされてきた。ただこうしたことや多くの区別を描くことによってのみ、研究者は冒頭に述べた大きな問題に接近可能となるかもしれない。こうした性質の問題は、常に人知の及ばないものにおける信仰の影を含意しているに違いない。しかしながら、われわれの問題は、この論文の主題の見方に従って始められたのである。(10)

ヨーロッパにおける個々人の精神性の形成過程にはキリスト教が大きな影響を与え、個人における精神活動、かつ社会における公的構想力への影響を与えたと朝河は判断した。個人と社会の精神性に大きく関わっているキリスト教は、教会権力を中心として現実の権力体制に必然的に影響を与え、歴史そのものを決める重要な役割を果たしたと考

Hosei University Repository

えた朝河は、このようなヨーロッパのキリスト教の存在、並びにそれによって生まれた現実の権力体制との比較を通して、封建制度について見つめる必要性があることを強調していたと考えられる。

3. 制度としての Feudalism および伝統性の継続について

朝河が考えていた封建的制度における社会とは、まずは「徳」を有する人々が支配階級を構成していることであった。このような支配階級とは、制度上、主君と従臣の関係によって存在するが、これは一方が他方に服従する関係とは違って、主君と武士の間には武士の奉仕による一種の双務的契約に基づいた互恵的同盟関係が成立していたものと考えられる。その結果、自然、かつ連盟的な形態の支配権力が形成され、行政制度の運営と財政の管理、軍事力の使用などに関しても、必然的に牽制的な関係が成立し、支配権力内での均衡がとれると朝河は判断していた。しかしながら、一二世紀から明治維新までの日本における封建時代の間に存在した政治権力は、必ずしもこのような主君と武士の同盟関係だけによって構成されていたわけではないとの批判がなされる余地もある。ただ、西洋世界においては、このような世俗的政治権力に対して宗教が権威を意味づける仲介者として、権力としても混在する現象が多く見られる。すなわち、西洋では、歴史上存在した様々な政治権力がキリスト教の教会と一体化することによって、相互的共生・依存関係におかれていたと考えられる。朝河は、西欧ヨーロッパにおける宗教と世俗的権力の相互的共生、かつ依存関係について、例えば、フランク王国とローマ教会関係の中から合致する現象を発見することができると主張している。朝河の論文を参考にしてみた限りでは、西洋のものよりも長い時間の間をかけて形成されてきた日本におけ

る政治的権威、すなわち制度としての天皇の存在とは、主君と武士との必然的共生関係を保ちながら明治以前まで維持されてきたものと考えられる。

…Half a century after the acceptance of Christianity by the Franks, Buddhism was introduced into Japan. The length of time it takes for a religion to thoroughly train a race collectively may well be measured even today by the conduct of the troops of the Christian countries thrown in campaign among the so-called inferior races. The purely moral influence of a religion over a people is probably slower than its political and social effects, but even the latter are apt to be exaggerated by its propagandists. Between the sixth or seventh and the twelfth or thirteenth century the interval was six hundred years, and yet the institutional study of feudal Japan and feudal Europe of the latter date does not seem to show that, either as an institution or as a principle, Christianity or Buddhism had been a fundamental cause of the gradual feudal formation. The important place which both religions have occupied in the feudal history cannot of course be denied. Institutionally, for instance, Buddhism in alliance with the Soga family hastened the Reform, the latter in turn constituting the necessary prelude to the feudal transformation of society. A similar connection between the Franks and the Roman Church forms a background for the rise of the feudal forces in Western Europe, where, still later, the Church seems to have exerted a great influence toward preserving longer and more easily than would otherwise have been possible the comparative hierar-

Hosei University Repository

Hosei University Repository

chy of the feudal organization. In various ways, also, religious considerations lay behind many a romantic incident in the history of feudalism, the effects of some of which have been far-reaching. Morally, too, the mental side of feudalism, -the spirit of chivalry and self-sacrifice, the permeat ing sense of contract, and the practical training in political and social conduct consequent upon the limited local interests of the fief and the balanced rights and obligations in more extended proportions, -may have in varying degrees been sanctioned, rationalized, or idealized, respectively, by Christianity and Buddhism. All these important considerations cannot, however, conceal the fact that feudalism has risen, developed, and fallen on both Christian and Buddhist soil, and withal independently from one another. In spite of the difference in religion and independence in history, the tremendous effects of both of which cannot be easily overestimated, the feudal mind of the East and of the West showed such a remarkable coincidence in the moral and material training it had received, that today, after their contact, Europe and Japan marvel at their unexpectedly facile understanding of each other. If their difference is significant, no less remarkable is their resemblance, and the latter must be not a little owing to the similarity in their historical discipline.(11)

…フランク王国がキリスト教を受容したその半世紀後、仏教が日本に伝来した。宗教がある人種全体を十二分に教育するのに要する時間の長さは、今日でさえ、キリスト教国の軍隊がいわゆる劣等とされる人種のなかに軍事行動を展開する行為によって計測が可能だろう。人々に及ぼす宗教の純粋に道徳

Hosei University Repository

的な影響は、恐らくその政治的、社会的な効果に比べ、より時間がかかるものであるが、その社会的効果でさえ、伝道者によって誇張されがちである。六〜七世紀から十二〜十三世紀にかけての時間的隔たりは六〇〇年に及んでおり、封建的日本と封建的ヨーロッパの一二〜一三世紀の制度的研究は、制度として乃至は原理としてもキリスト教や仏教が漸次的な封建制度の形成の基礎となってきたことは、いまだ提示されているようには思われないのである。二つの宗教が封建制度の歴史において占めてきた重要な位置というものは、もちろん否定されるはずがない。例えば、制度上では蘇我氏と同盟関係にあった仏教は大化改新を早めたのであり、回りまわって社会の封建制への変容に必要な前置きとなっていたのである。フランク王国とローマ教会との同様な関係は、西欧の封建勢力勃興の背景を形作り、なおも後には教会はすべての点で封建制機構の相対的支配層を可能たらしめてきた以上に、それがより長くより容易な方向へと向うように大きな影響力を発揮しているように思われるのである。また、様々な方法で、封建制度の歴史における多くの浪漫的な出来事の背後に宗教的判断が横たわっており、遠大であり続けるような効果をもたらすのであった。道徳上もまた、封建制度の心的側面、騎士道精神や自己犠牲、契約の分別の浸透、そして政治的社会的振舞いの実践的訓練は、封土の限られた地域的利益と均衡のとれた権利と義務に対してより拡大した規模で結果を招来するのであり、それらはキリスト教や仏教によってそれぞれさまざまな程度で、裁可を受け、理屈づけられ、あるいは理想化されてきているかもしれない。しかしながら、これらすべての重要な考察は、封建制度がキリスト教と仏教の両方の土壌において、同じようにお互い独自に、勃興し、発展し、没落した事実を覆い隠すものではない。宗教上の違いや歴史上の独立性にもかかわらず、両宗教の莫大な効果は容易に過大評価されず、東洋と西洋の封建的精神は、道徳やこれまで受けてきた物質的教育におけ

Hosei University Repository

るこうした注目すべき偶然を示しており、今日、ヨーロッパと日本の接触の後は、予想を裏切って互いを容易に理解することに驚嘆するのである。もしそれらの違いが重大ならば、もちろん注目すべきは類似点であり、それは史的にしつけられたものにおける類似性に少なからず負っているに違いないのである。(12)

ここでは、飛鳥時代以来、朝鮮半島の百済から日本に伝来されるに至った仏教が、時代を経て、武士道精神を基調とする主君と武士との間における共生・依存関係に対しても長い時間をかけて影響を与えてきたものと判断することができる。例え、西欧世界との歴史的かつ宗教的な相違が存在しても、両方の社会における封建制度は効率的な社会統治並びに社会統合体系としてその役割を果たしつつ、それぞれの権力機構と階層構造をより長く安定させ、社会秩序の安定に寄与するという見識を見て取ることができるだろう。朝河は、このような政治状況を指して、政治の封建化（Feudalization of Government）、或いは封建的政治（Feudal Government）と表現していたのである。

日本においては、豊臣秀吉による伴天連追放令（一五八七年）に続く、徳川家康のキリスト教禁止令（一六一四年）以来およそ三世紀に渡ってキリスト教信仰が禁止されていたが、明治維新後六年目の一八七三年になり解禁された。長崎や島原など九州地方の一部では、弾圧の後もカソリック信仰は密やかに絶えることなく生き延びたが、明治の新時代を迎え、新たにプロテスタンティズムが紹介されると、当時の知識人階層であった士族のなかからは、英米の文化や言語を獲得することの重要性を察知し、他に先立ってキリスト教を受け入れる朝河のような人物が多く輩出した。特に藩閥政治からはほぼ排除されていた士族層では、士族という身分の大義名分の生き残りを掛けたものだったと言えるだろう。内村鑑三や新渡戸稲造など、この時代におけるキリスト教信仰を有する指導者たちもこうした系

Hosei University Repository

譜と連なるものがあると考えられるが、彼らも朝河同様、幼いころから武士としての教育を受けながら成長した背景を有しており、そんな彼らにとって、キリスト教とは、新時代の武士道を継承し媒介する手段ともなり得たのである。このように、自由の理念を大きく標榜しながらも、一方では禁欲的態度を求めるキリスト教における生活態度は、「武士道」の美徳を最高の価値として認識していた彼らの同感を最も得やすいものだったのではないだろうか。すなわち、正義と真理の為に生命を惜しまざる精神である伝統を内包する「武士道」に依拠しながら、西洋のキリスト教と接合することによって、時代状況を乗り越えようとしたものだと考えられる。同時に、彼らが西洋の宗教理念であるキリスト教を内面化する際には、日本の時代状況を含んだ合理的解釈を行って、それぞれの良心と道徳を確立するとともに、いわば社会全体における公共善の確立に貢献しようとしたのであろう。

4．土着的伝統の重要性の強調—むすび

明治の新時代以降の近代においては非封建制度的要素（Non-Feudal Elements）が強調され、かつ伝統的身分制度が解体されたことにより、国家の制度的外観は欧米諸国の望むような形態を持つものとなり、啓蒙的側面からの近代化を果たし得るものとなった。しかしながら、朝河はそこで、長い歴史的時間をかけて完成してきた社会統治および社会統合体系が将来的には徐々に崩壊の憂き目を見るであろうことを予見したことによって、新たな憂慮を生じさせてしまうのである。

とくに主君と武士の相互的奉仕によって続けられてきた互恵的関係の崩壊がその実質的内容物の破壊にまで及んで

Hosei University Repository

しまい、その結果として、主君と従臣の関係の唯名性（nominalism）だけが残されたことにより、独占的権力の集中構造が新たに生まれたのではないだろうか。彼は、土着的伝統性の重要性について次のように強調している。

Thus our apparently casual question has led us to an interesting reflection that the history of the Far East is not without lessons of serious value to the student of comparative history. Of these, one stands before us. It is something to know that a feudalism grew up in Japan independently of but coincidently with that in Europe, out of a set of causes much similar in nature and principle to those which gave rise to the latter. The subject is large, and its interest from the institutional point of view needs no commendation, while its importance may be measured by the great material and mental effects of feudalism that are still operating and will for a long time to come continue to operate in the midst of society of Japan and of the West. The study of feudal origins promises to be as difficult in Japan as it has been in Europe. To such a complex and prolonged study, the present essay forms a brief introduction. It brings together from ancient Japan and China some of the forces which were artificially united in 645 A.D., and out of which grew an unexpected but thoroughly indigenous feudalism of Japan.…

…Moreover, owing to the peculiar conditions under which the Reform was effected, its investigation will bring the student in touch with certain important features of Chinese history and civilization, whose interest can scarcely be less than that of the Japanese. Here, however, the interest is something more

Hosei University Repository

than merely historical or institutional. Two cultures, entirely different from each other both in degree and in kind, are not only contrasted, but are shown to have been fused together. Perhaps no subject is more interesting to the student of the science of society than the effects of the meeting of two races or two civilizations. The history of the Japanese institutional changes caused by the Reform, to which the following pages are an introduction, forms, great as the subject is, but a portion of the still greater problem, whose interest is sociological, and which may be considered in the terms of the general human evolution.(3)

このように、我々のどうやら偶然の問いは、極東の歴史が比較歴史学の研究者にとって価値ある教授ともなるという興味深い省察へと我々を導いた。もちろん、あることが我々の前に立ちはだかっている。それは、日本で独自に成長した封建制度が、ヨーロッパが生み出した本性と原理においてひどく類似しているという要因から、ヨーロッパの封建主義と時を同じくしたものであることを理解するための何かである。その問題は大きく、制度観から発する問題関心は賞賛を必要としていない、というのもその重要性は、日本社会と西洋社会の真っ只中でいまなお作動しており、これからも長きに亘って作動し続けるであろう封建制度の大きな物質的精神的影響によって評価を受けることになるだろうから。封建的起源に関する研究は、ヨーロッパで困難であり続けているのと同様に、日本でも困難であると断言できる。そのように複雑で長期に及ぶ研究にとって、この論文は簡潔な序論となろう。封建制の起源とは古代日本と中国が西暦六四五年に人為的に結託した一部の武力が一緒になってもた

Hosei University Repository

らしたものであり、そこから予期しえないような、完全に土着の封建制度が育ったのである。……

……そのうえ、大化改新が影響をこうむった独特の条件から、この研究は研究者を中国の歴史と文明のある重大な特徴に触れされることになるだろう。中国への関心は日本への関心よりも少ないはずがない。しかしながら、ここでの関心は単に歴史的あるいは制度的である以上のものに過ぎない。二つの文化は、程度においても種類においても、お互いにまったく異なるものであり、対照されるばかりでなく、ともに融合され続けているように示されている。たぶん社会科学の研究者にとって、二つの人種あるいは二つの文明が遭遇がもたらした結果以上に興味深い主題はないであろう。日本の制度的変化の歴史は大化改心により引き起こされたものであり、以下の頁では導入、形態、主題としての重要性などが続くが、より重要な問題の一部である。その問題への関心は、社会学的であり、一般的人類の発展という術語において考慮されるものであって構わないだろう。

ここで彼は、学問世界における既存の歴史学に対する批判的評価を行っており、大化改新を日本と中国との間における異文化融合後の制度的変化の過程であるという画期的な認識を示した。

日本と中国の間の文化は、条件も種類も異なるものであるが、この両者における文化は、対比的ではなく融合してきたものと朝河は捉えていたのであろう。それは、大化改新という大変革が実現したことにおける天皇の存在的役割についての評価であった。この積極的評価を下した朝河は、同時に、日本の伝統的封建制と天皇との関係に関する歴史認識を欧米の知識人たちに紹介する契機を創った点で、高く評価されなければならないと考えられる。

Hosei University Repository

ここでは、博論執筆後に書かれた序文を中心に封建制度をめぐる伝統と文化に対する朝河の問題意識について探ってみた。彼は、日本を離れて活動しつつも、真の愛国と正義について実証的な歴史学における検証を通して訴求を行っていたのである。彼は、単に封建制の歴史的事実を詳述したにとどまらず、新たな見解を導出したものの、こうした合理的理念を提示できないことに悩んだであろう。この背景のなかには、祖国における士族層出身として彼の使命感に加え、キリスト教信仰に基づく宗教的信念や在外日本人としての国家意識との相克があったものと考えられる。生まれながら明治維新による文化的変化の大きな波を体験した朝河は、現実に抗するように文化的一貫性こそが重要であるという立場をもっていた。彼が信念としていたのは、人間として有することのできる本質的普遍性であり、それは盲目的確信ではなく、理想的伝統の保持であると考えられる。彼の初期論文で論じられてきた封建制度に対する判断も、単純に否定的印象を前提としたものではなく、むしろ、欧米に比べても進んだ歴史的要素を持ち、かつ道徳規範を身につけた武士と庶民が互恵的に生活を共にしてきたという日本の封建制のあるべき姿を投影させたものであろう。

また、彼は、自らの専門分野であった歴史学を通して、世界の中で日本がとるべき政治的文化的方向性について訴えると同時に、欧米列強が帝国主義のもとに植民地を拡大していくなかで、道徳的意義を大前提としながら、歴史認識を踏まえた国家のあり方に関する持論を展開させた。自らの信念のもと、祖国（A Homeland）を積極的に擁護してきた彼は、日露戦争に勝利した後から祖国日本（Japan as the native land）が見せた欧米列強と変わらない剥き出しの野心に対して、彼は狼狽しながらも祖国にさまざまな働きかけを試みたのであった。第二次大戦後には、人類と世界への普遍性に反する行為と祖国を批判せざるを得なかった朝河の判断は、歴史学研究を通した合理的社会統合

Hosei University Repository

の方向性の確保、そして究極的には、祖国日本と人類全体の新たな普遍性（Generality）の確保と進歩といった理想の実現（Ideal Realization）への表明ではなかっただろうか。

（1）清水美和『「驕る日本」と闘った男」、東京、講談社、二〇〇五年九月、四〇～四十五頁参照

（2）朝河貫一書簡編集委員会編『幻の米国大統領親書―歴史家朝河貫一の人物と思想』、東京、北樹出版、一九八九年六月、百二十七―百二十八頁（朝河貫一年表）参照

清水善和「「驕る日本」と戦った男―日露講和条約の舞台裏と朝河貫一」、東京、講談社、二〇〇五年九月、二百六十五頁（本書に関係する朝河貫一年表）参照

（3）Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903

（4）Kan'ichi Asakawa "Some of the Contributions of Feudal Japan to the New Japan". The Journal of Race Develropment (JSTOR), Vol.3 No.1, July, 1912, pp. 6-8

（5）Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903, p. 5

（6）日本語訳―著者（崔）

（7）Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903, p. 5-6

（8）日本語訳―著者（崔）

（9）Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903, p. 3

（10）日本語訳―著者（崔）

（11）Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903, p. 3-4

Hosei University Repository

(12) 日本語訳―著者（崔）

(13) Kan'ichi Asakawa "The Early Institutional Life of Japan: a study in the reform of 645 A.D.", Waseda University Press, Printed at Tokyo, Shueisha, 1903, pp. 4-6

その他の参考文献

朝河貫一『日本の禍機』、東京、講談社、一九八七年四月

"Land and Society in Medieval Japan" by The Committee for the Publicat on of Dr. K. Asakawa Works in cooperation with The Council on East Asian Studies, Yale University, Published Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo, Japan 1965

Kan'ichi Asakawa "The Documents of Iriki.", by The Committee for the Publicat on of Dr. K. Asakawa Works in cooperation with The Council on East Asian Studies, Yale University, Published Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo, Japan 1955

朝河貫一書簡編集委員会編『幻の米国大統領親書―歴史家朝河貫一の人物と思想―』、東京、北樹出版、一九八九年六月

阿部善雄『最後の日本人―朝河貫一の生涯―』、東京、岩波書店、一九八三年九月

清水美和『「驕る日本」と闘った男』、東京、講談社、二〇〇五年九月

山内晴子『朝河貫一論―その学問形成と実践―』、東京、早稲田大学出版部、二〇一〇年三月

矢吹晋『朝河貫一とその時代』、東京、花伝社、二〇〇七年十二月